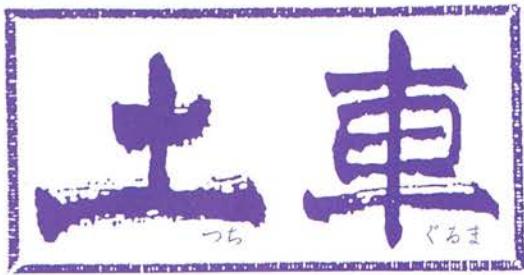


—令和2年6月20日発行—

公益財団法人 古代学協会だより



古代学協会所蔵資料
京都府宇治市木幡出土 須恵器骨蔵器



京都府宇治市木幡といえど、
藤原氏北家嫡流（後の摂関家）
の墓域が存在する土地として名
高い。その一部は、宮内庁に
よつて藤原氏出身の皇妃の陵墓
の「宇治陵」に治定されてい
る。昭和三十八年（一九六三）、
この地の一画に日本専売公社共
済組合の職員住宅団地が建設さ

れることになり、古代学協会が
事前の発掘調査を行つた。当
然、ここでは平安時代中・後期
の藤原氏の墳墓の検出が目ざさ
れた。ところが実際に発見され
た遺構は六世紀の古墳の残骸で
あつて、その点では協会の期待
しかし、その調査中、思いも

よらぬ朗報がもたらされた。近
辺に住む岩崎実成氏がこの地で
出土した須恵器を持参し、それ
を協会に寄贈したいと申し出ら
れたのである。これは古代には
しばしば骨蔵器として使われて
いた「薬壺」と通称される有蓋
台付短頸壺であり、これも墳墓
の埋葬主体であったと見て間違
いない。同氏によると、戦後ま
もない時に、「宇治陵」十四号
地の南側の付近で偶然に発見さ
れたものであつたという。骨蔵
器の外面には木炭の付着があつ
たというから、これを納めた墓
は木炭を充满させた土坑墓で
あつたらしい。

木幡の藤原氏墓地の史料上の
初出は平安時代前期の藤原冬嗣
の墓であるのだが、この骨蔵器
はそれをさかのぼる奈良時代後
半から平安時代初期の遺品であ
る。すなわち、木幡の地には藤
原氏の墓地になる以前にも高位
の貴族の墓が営まれていたこと
が明らかになつたのである。

山田邦和

（同志社女子大学教授・当協会理事）

私は、一九六八年三月に同志社大の学部と大学院を終えた後、一年余りであるが古代學協会の研究員として協会にお世話になり、平安博物館の開館準備にあたった。この間、同志社の学部の三年間は角田先生の「比較原始文化史」（内容は「古代学概説」にほかならなかった）の講義、大学院の修士・博士課程の七年間は先生の「古代学」の講義と演習、さりに協会にお世話になつた一年あまりの、合わせて十二年ほどの間、毎年角田先生の「古代学」の講義を聽講した。

このうち同志社時代の十年間は、共に同志社で考古学を志し、のちに札幌大学教授となる故石附喜三男君と二人で一緒に先生の講義を聞いた。ただそのころの同志社の考古学研究室には考古学の基本図書、特に歐米の文献はほとんど揃つていなかつたので、大学院の講義・演習は

それにもかかわらず石附君と同じ様に、私も角田先生の「古代学」の講義に魅せられた。それは洋の東西を問わず、原始・古代史の解明には何よりも世界史的視点が必要なこと、さらに「文献学（文献史学）と「考古学」を総合した、まさに「古代学」の発想が求められることを、情熱をこめてきわめて説得的に語られたからである。またそこで論じられた具体的な原始・古代史像も、アーチークの旧石器時代からギリシャ・ローマ・隋・唐、さらに日本の奈良・平安時代にまで及ぶ雄大なもので、「角田古代学」の広さとその有効性を納得させるものであった。



「令和大礼」の「新儀」と「先例」

京都産業大学准教授 久禮 旦雄

一、譲位（退位）・即位の儀式の新要素

四月三十日に行われた「退位礼正殿の儀」は、剣・璽や御璽・国璽とともに天皇・皇后が立たれ、天皇が「お言葉」を述べられるというかたちをとった。剣璽などと共に天皇が出御されるのは、平安時代の『儀式』（貞觀儀式）や、それに基づいて江戸時代の光格天皇まで行われた讓位の儀式を参考にしたと思われるが、後継者を指名せず、譲位（退位）に際しての国民への「感謝」を述べられるのは新しいかたちである。一方、五月一日に行われた「剣璽等承繼の儀」「即位後朝見の儀」は明治の皇室典範・登極令で定められ、平成の皇位繼承で行われたかたちを踏襲している（承繼の儀）のかたちは平安時代初期の「践祚」に遡る。

十月二十一日に行われた「即位礼正殿の儀」は、平成の時は高御座・御帳台の前を通られた天皇・皇后両陛下の出御が、今回は後ろから高御座・御帳台に入れられ、御帳が上がると、黄櫨染御袍と十二單を召された天皇・皇后のお姿が参列者と国民の前に現れるかたちとなつた。これは「儀式」に「宸儀初見」と記されるもので、いわば古儀の復興といえる。

平成の際には、イギリスのチャーチルズ皇太子をはじめ、参列された諸外国の要人にお姿を見せるために、天皇・皇后のお姿が参列者と国民の前に現れるかたちとなつた。これは「儀式」に「宸儀初見」と記されるもので、いわば古儀の復興といえる。

十一月十四日夜から十五日未明にかけては、皇室の行事として「大嘗祭」の「大嘗宮の儀」が行われた。大嘗祭は、日本の農耕文化に基づく新嘗祭をもととして、天武・持統天皇朝に成立し、中世の中止と近世の復興を経て、明治の皇室典範と登極令でほぼ現在のかたちとなつた。今

（正会員）



太宰府市・坂本八幡宮に建つ「令和」の石碑

予算の関係からプレハブとなり、悠紀殿・主基殿と廻立殿の屋根が茅葺きから板葺きに変えられたことが議論を呼んだ。大嘗宮の一般公開で拝見した限りにおいては、必ずしもその威儀が損なわれたとは感じられないが、次代に向けての検討が必要であろう。

さらに大嘗宮は、一般公開の後、従来のような焼却・埋納ではなく一部をバイオマス発電で再利用されることとなつた。同様に、大正から全国的に行われた「庭積の机代物」は、個別の都道府県を対象とする悠紀・主基地方とともに、国民による天皇への奉祝を示すものであつたが、食事の問題から、從来埋納されていたものが再利用されている。豊かな自然に守られた日本の農耕文化の象徴ともいえる大嘗祭だが、必ずしもその豊かさに甘えてはいけないという姿勢が示すものとも言える。

皇位繼承の諸儀礼は、「先例」を重んじながらも、その時々の政治的・経済的状況に応じた「新儀」を加え、維持され、時に中絶を経た復興も行われた。今回の「令和大礼」も、その精神を受け継ぎ、時代に即したかたちをとつた。その精神は今後も継承されていくことであろう。

ここでは「令和大礼」の中心となる儀礼の新旧の要素についてまとめたおきたい。

角田文衛先生の「古代学」講義から学んだもの

国立歴史民俗博物館名譽教授
大阪府立近つ飛鳥博物館名譽館長

白石 太一郎



下鴨中川原町の角田先生のご自宅、あるいは当時北大路通りにあつた古

代学協会の京都事務所で行われた。石附君と共に十年間も角田先生の

「古代学」を聴講したのは、受講は大変であるが、それがきわめて魅力的であつたからにほかならない。受講が大変であるというは、講義・演習では初めから終わりまで、先生の質問攻めに遭うからである。「こんなことも知らないのですか」という先生の溜息が、一時間の間に何度も発せられたことか。

それにもかかわらず石附君と同じ様に、私も角田先生の「古代学」の講義に魅せられた。それは洋の東西を問わず、原始・古代史の解明には何よりも世界史的視点が必要なこと、さらに「文献学（文献史学）と「考古学」を総合した、まさに「古代学」の発想が求められることを、情熱をこめてきわめて説得的に語られたからである。またそこで論じられた具体的な原始・古代史像も、アーチークの旧石器時代からギリシャ・ローマ・隋・唐、さらに日本の奈良・平安時代にまで及ぶ雄大なもので、「角田古代学」の広さとその有効性を納得させるものであった。

この時期の私自身の大きな悩みは、大きな興味を持つ日本古代史の研究を、文献史学の立場でやるのか、それとも考古学でやるのかという問題であった。これに関しては、二〇〇四年に『ちくまプリマーブック』で刊行した『考古学と古代史の間』（二〇〇九年にちくま学芸文庫に入れられた）にも書いたが、當時の考古学の先生方の多くは、文献資料操作の段階で一緒にしてしまった。一方、角田先生の基本的なお考えは、資料操作の段階で両方の方法的信頼性が保てなくなるので、厳に慎むべきであるというものであった。一方、角田先生の基本的なお考えは、資料操作の段階で両

古学と文献史学の協業に関して、角田先生のように両者の総合を目指すべきであるとする「総合派」と、それには慎重な「峻別派」の二つの流れがある。現状ではやはり峻別派の方が多い。その代表格は岡山大学名誉教授の故近藤義郎先生で、考古学資料と考古学的方法だけで、どこまで資料操作の段階で一緒にしてしまった。一方、角田先生の基本的なお考えは、資料操作の段階で両



角田先生と共に 1999年3月3日
国立歴史民俗博物館副館長室で

ただ私自身は、日本の古代史の解明のために、角田先生が強く主張されたように、方法上守らなければならぬ一つの立場として立派なものだと考えている。ただ私自身は、日本の古代史の解明のために、角田先生が強く主張されたように、方法上守らなければならぬ一つの立場として立派なものだと考えており、これこそが、先生の講義を十年余り聞いてえた結論にほかならない。

（当協会顧問）

など。最近は梅原猛先生の本を手にすることが多いです。独自の発想のところを読むと胸がすっとするのです。

また、クラシック音楽を聴いたりもしています。モーツアルトが大好きで、関連の本を数十冊持っています。四十年余り前に黒板先生ご夫妻に声をかけて戴いて東京のモーツアルト協会の「モーツアルトの旅」に同道し、ウイーン、ザルツブルグを訪ね、オペラなどを聞いた時のこと思い出しながら「魔笛」などを聞いています。現地で求めた大判の写真入りの本を紐解くこともあります。

雜駁なことを話しているうちに時間が過ぎてしまいました。今後、何か本を書くとしたら「京都もの」を書いてみたいとは思っています。専門書ではなく平易な読み物的なもの。思いつくままに二百枚ほどの原稿がたまっています。

(編)

そこで、この本を手にすることも多いです。独自の発想のところを読むと胸がすっとするのです。

車の運転免許を取ったので、車を運転するためには、何とかして継承していくのですが、やはり伝承の枯渇が急速に進んでいるのが現状です。今日のファーストフード嗜好や山の幸を育む森林の荒廃などが主な原因だと思うのですが、それらに歯止めをかけるためにも、何とかして継承していく必要があります。また、たいへん寂しく残念なことがあります。



学部生の頃、自転車で訪れた札幌・時計台

自転車で日本一周されたとか。
大学の四年間は、長期休暇などを大いに利用して日本中を旅していました。目的は色々ありました。京都

影響を受けた著書はありますか。

渡辺誠先生の『縄文時代の植物

食』が座右の書です。刊行から半世紀近くが経ちましたが、先生が牽引

されたいた縄文時代生業の実証的

総合的な研究はきわめて画期的なも

のでした。研究対象の細分化が進

み、なかなか全体を見通せない今日

にあって、進むべき方向を見失わな

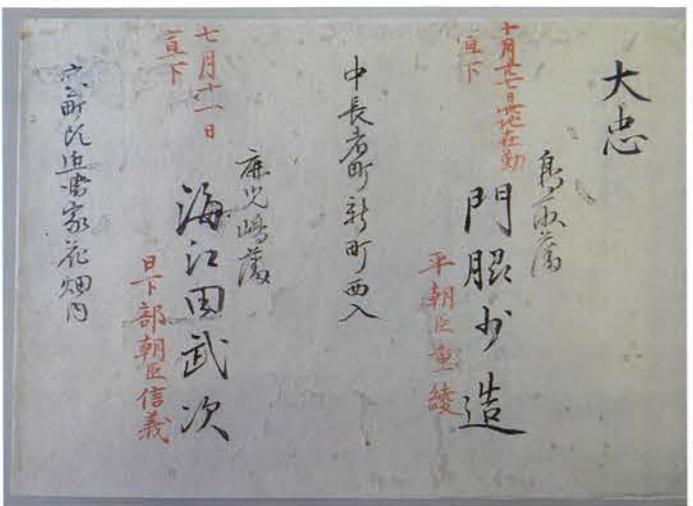
いよう、道標として読み続けたい本

は共に新政府の警察機構である彈正台の三等官である大忠の地位にあり、その京都支台（西京出張）における職務に就いていた。したがって、この『反古 西京台員』は明治初期の彈正台京都支台の職員名簿であつたとみて間違いない。

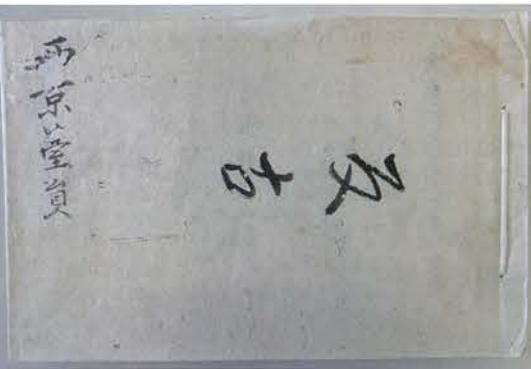
◇『反古 西京台員』 角田文衛博士 遺贈資料の整理（五）

『反古 西京台員』と題された冊子がある。これを開いてみると、最初に「大忠」の門脇少造と海江田武少造重綾（一八二六～一八七二）はもと鳥取藩士、海江田武次信義（一八三二～一九〇六）はもと薩摩

藩士で、明治二年（一八六九）に藩士で、明治二年（一八六九）に明治初期の彈正台京都支台の職員名簿であつたとみて間違いない。この名簿には、門脇と海江田以下、計一二二名の名が記されている（一部重複しているため實際には一一三名）。名前の他、職名・任命月日などが記されている。ここで特に注目されるのは、各々の名の左下には朱書きの小さな字で門脇少造は平朝臣重綾、海江田武次は日下部朝臣信義というように氏姓名も併記されていることである（写真）。



角田博士はかねてから、日本人の名では「氏」と「家」の名を区別しなければならないことを強く主張していた。明治政府が発行した「職員録」等をみてもわかるように、明治初年の公的文書には人名は門脇・海江田などの家名ではなく、氏姓名で記されている。しかし、明治四年十月の「姓戸不称令」で「姓戸」（平などの姓と朝臣などの戸・カバネ）の使用の禁止と「苗字實名」のみを用いることが定められた。



『反古 西京台員』表紙

『反古 西京台員』には巳七月（明治二年七月）から午六月（明治三年六月）までの人事が記されている。「姓戸不称令」の発令前にも拘わらず、現場では氏姓名と家名や通称と書きを厳重に区分しながらも、既に家名・通称が主として用いられていました。博士がこの『反古 西京台員』を入手されたのも、こうした人名の記載ことがわかる史料といえよう。角田博士がこの『反古 西京台員』を入手されたのも、こうした人名の記載方法の変遷を究明するための資料とされています。

竹内 千津

第九回 角田文衛古代学奨励賞 受賞者インタビュー 板垣優河氏に聞く

なぜ考古学の道に？

父親の実家が翡翠文化で有名な新潟県糸魚川市にあったので、小学生の頃から夏休みには長者ヶ原遺跡やフォッサマグナミュージアムを訪ね、昔の暮らしや石には興味をもっていました。また中学三年のときにエジプトを旅行して以来、考古学への関心を深め、大学へ入学した当初は古代エジプトの研究をしたいと考えていました。ですが、大学では山岳部に入つて日本各地の山を登り、またその延長で、自転車で日本一周に挑戦しているうちに、日本列島を舞台とした自然豊かな暮らし、特に縄文時代の食生活に魅かれていきました。

お年寄への聞き取り調査で感じることは。

トチ餅のように、地域の特産品として命脈を保っているケースはありますが、やはり伝承の枯渇が急速に進んでいるのが現状です。今日のファーストフード嗜好や山の幸を育む森林の荒廃などが主な原因だと思います。また、たいへん寂しく残念なことがあります。



学部生の頃、自転車で訪れた札幌・時計台

自転車で日本一周されたとか。
大学の四年間は、長期休暇などを大いに利用して日本中を旅していました。目的は色々ありました。京都

とではありますが、戦中戦後の食糧難の時代にドングリやトチを食べた事長の青春時代、研究者として一緒に就かれたばかりのころのエピソードは古代学協会の始まりとオーバーラップして興味深いお話の数々でした。「龍谷版京都本」を読んでみたいファンも多いはず。楽しみに待ちたいと思います。

二回にわたりお届けしました、龍谷理事長の青春時代、研究者として一緒に就かれたばかりのころのエピソードは古代学協会の始まりとオーバーラップして興味深いお話の数々でした。「龍谷版京都本」を読んでみたいファンも多いはず。楽しみに待ちたいと思います。

繩文時代は人々は安定した生活をおくつていたのでしょうか。

単純な比較はできませんが、ドン

ケリのアクト抜きをやるにせよ、ヤマトイモの根を掘るにせよ、なかなか骨が折れる作業ばかりなので、縄文人の状況や、現代日本の食料自給率の低さを考えると、農耕社会・文明社会がもたらした物質的豊かさも無条件に肯定することはできません。その

ことは。

繩

二〇一九年度第二回
公開講演会の開催

◇「古代寺院の実像に迫る」

二〇二〇年二月一日（土）、京都文化博物館別館・講義室において、第二回公開講演会「古代寺院の実像に迫る」が開催されました。

講師と演題は、中島正先生（花園大学非常勤講師、元木津川市教育委員会）「恭仁京と奈良山の寺・神雄寺」、井上一稔先生（同志社大学教育学部教授）「室生寺の歴史とその仏像」

講演後、山田邦和理事（同志社大学教育学部教授）が司会に加わり座談会となりました。両講演に共通する水（龍）によつて疫病を払うということに話題がよび、大いに盛り上がりました。参加者からは「大変興味深い内容で『古代寺院の実像に迫る』

第一弾
「是」
「非」
者約五〇名。



「京の翠とわざの粹
—緑釉陶器と緑釉瓦—」の展示

◇「古代学協会研究報告第十六輯
平安期緑釉陶器・緑釉瓦生産の多分野協働型研究—石作窯・小塩窯発掘調査報告」石井清司・市川創編集

古代学協会では、「平安期緑釉陶器・緑釉瓦生産の多分野協働型研究」の一環として京都市西京区にある石作1・2号窯および小塩1号窯（洛西窯跡群）の出土遺物・遺構図面の整理、報告書刊行を平成二十九年度から三カ年をかけて進めました。その総仕上げとして四月十一日から八月三十日（緊急事態宣言の影響により五月十九日に再開し期間が延長された）まで京都文化博物館において「京の翠とわざの粹—緑釉陶器と緑釉瓦—」が開催されました。今回の展示では、これまで広く知られていなかつた石作1・2号窯出土の須恵器・緑釉陶器素地と緑釉陶器とともに施釉焼成に必要な窯道具を展示し、またこの効果研究成果の一部である平安京の緑釉陶器生産の変遷、さらに古代の陶工の卓越した技術とその技術を今に伝えようとする陶芸家の取り組みが紹介されました。

また、日本で唯一と思われる平安緑釉の焼成実験を紹介。（公財）生涯学習かめ

おか財団による「小型三角窯」の復元とその窯での焼成実験は、考古学者と現代の陶芸家が篠窯跡群での発掘調査成果をもとに古代の技術を蘇らせる企画で、周辺での粘土の採取からうつわの成形、マキの確保と窯の構築、さらに高温での須恵質の素地の焼き上げ（一次焼成）と釉薬を塗つて低火度で焼き上げる二次焼成までの工程と焼き上がつた製品の一部を展示。答えのない課題に参加者が真摯で、かつ楽しく取り組んでいた様子を、映像によつて見ることができます。

出版案内

▽関口 力氏

同氏は、二〇二〇年四月十三日、京都市内病院において逝去。満六十八歳。一九五一年京都府生まれ。

國學院大學大学院満期退学。古代学

協会研究員（平安博物館嘱託、古代

学研究所講師、同助教授）として『平安時代史事典』の編纂や仁和寺所蔵史料の調査・研究などに携わると共に『古代文化』編集主任も務められ

た。主著として『撰閑時代文化史研究』（京都、思文閣、二〇〇七年）。

國學院大學において博士（歴史学）

取得。二〇一九年より当協会古代学

講座『小右記』講読（入門）の講師

を務め、初学の方にも分かり易い講義をしていただいた。

研究の普及を願い、同内容のものを研究報告として刊行した。刊行にあたつて推進役を担つていただいた石井清司・市川創の両客員研究員およ

び研究分担者、研究協力者諸氏のご尽力に謝意を表する次第である。

二〇二〇年六月二十日刊、A4判、二二〇〇円+税。

本文一八四頁・図版十八頁、頒布予価

印 刷 発行日

604-8131 菅屋町四八
電話〇七五-二五二一三〇〇〇
令和二年六月二十日
創栄図書出版社株式会社

研究の普及を願い、同内容のものを研究報告として刊行した。刊行にあたつて推進役を担つていただいた石井清司・市川創の両客員研究員およ

び研究分担者、研究協力者諸氏のご尽力に謝意を表する次第である。

二〇二〇年六月二十日刊、A4判、二二〇〇円+税。

本文一八四頁・図版十八頁、頒布予価

印 刷 発行日

604-8131 菅屋町四八
電話〇七五-二五二一三〇〇〇
令和二年六月二十日
創栄図書出版社株式会社

研究の普及を願い、同内容のものを研究報告として刊行した。刊行にあたつて推進役を担つていただいた石井清司・市川創の両客員研究員およ

び研究分担者、研究協力者諸氏のご尽力に謝意を表する次第である。

二〇二〇年六月二十日刊、A4判、二二〇〇円+税。

本文一八四頁・図版十八頁、頒布予価

印 刷 発行日

604-8131 菅屋町四八
電話〇七五-二五二一三〇〇〇
令和二年六月二十日
創栄図書出版社株式会社

研究の普及を願い、同内容のものを研究報告として刊行した。刊行にあたつて推進役を担つていただいた石井清司・市川創の両客員研究員およ

び研究分担者、研究協力者諸氏のご尽力に謝意を表する次第である。

二〇二〇年六月二十日刊、A4判、二二〇〇円+税。

本文一八四頁・図版十八頁、頒布予価

印 刷 発行日

604-8131 菅屋町四八
電話〇七五-二五二一三〇〇〇
令和二年六月二十日
創栄図書出版社株式会社

研究の普及を願い、同内容のものを研究報告として刊行した。刊行にあたつて推進役を担つていただいた石井清司・市川創の両客員研究員およ

び研究分担者、研究協力者諸氏のご尽力に謝意を表する次第である。

二〇二〇年六月二十日刊、A4判、二二〇〇円+税。

本文一八四頁・図版十八頁、頒布予価

印 刷 発行日

604-8131 菅屋町四八
電話〇七五-二五二一三〇〇〇
令和二年六月二十日
創栄図書出版社株式会社

研究の普及を願い、同内容のものを研究報告として刊行した。刊行にあたつて推進役を担つていただいた石井清司・市川創の両客員研究員およ

び研究分担者、研究協力者諸氏のご尽力に謝意を表する次第である。

二〇二〇年六月二十日刊、A4判、二二〇〇円+税。

本文一八四頁・図版十八頁、頒布予価

印 刷 発行日

604-8131 菅屋町四八
電話〇七五-二五二一三〇〇〇
令和二年六月二十日
創栄図書出版社株式会社

研究の普及を願い、同内容のものを研究報告として刊行した。刊行にあたつて推進役を担つていただいた石井清司・市川創の両客員研究員およ

び研究分担者、研究協力者諸氏のご尽力に謝意を表する次第である。

二〇二〇年六月二十日刊、A4判、二二〇〇円+税。

本文一八四頁・図版十八頁、頒布予価

印 刷 発行日

604-8131 菅屋町四八
電話〇七五-二五二一三〇〇〇
令和二年六月二十日
創栄図書出版社株式会社

研究の普及を願い、同内容のものを研究報告として刊行した。刊行にあたつて推進役を担つていただいた石井清司・市川創の両客員研究員およ

び研究分担者、研究協力者諸氏のご尽力に謝意を表する次第である。

二〇二〇年六月二十日刊、A4判、二二〇〇円+税。

本文一八四頁・図版十八頁、頒布予価

印 刷 発行日

604-8131 菅屋町四八
電話〇七五-二五二一三〇〇〇
令和二年六月二十日
創栄図書出版社株式会社

研究の普及を願い、同内容のものを研究報告として刊行した。刊行にあたつて推進役を担つていただいた石井清司・市川創の両客員研究員およ

び研究分担者、研究協力者諸氏のご尽力に謝意を表する次第である。

二〇二〇年六月二十日刊、A4判、二二〇〇円+税。

本文一八四頁・図版十八頁、頒布予価

印 刷 発行日

604-8131 菅屋町四八
電話〇七五-二五二一三〇〇〇
令和二年六月二十日
創栄図書出版社株式会社

研究の普及を願い、同内容のものを研究報告として刊行した。刊行にあたつて推進役を担つていただいた石井清司・市川創の両客員研究員およ

び研究分担者、研究協力者諸氏のご尽力に謝意を表する次第である。

二〇二〇年六月二十日刊、A4判、二二〇〇円+税。

本文一八四頁・図版十八頁、頒布予価

印 刷 発行日

604-8131 菅屋町四八
電話〇七五-二五二一三〇〇〇
令和二年六月二十日
創栄図書出版社株式会社

研究の普及を願い、同内容のものを研究報告として刊行した。刊行にあたつて推進役を担つていただいた石井清司・市川創の両客員研究員およ

び研究分担者、研究協力者諸氏のご尽力に謝意を表する次第である。

二〇二〇年六月二十日刊、A4判、二二〇〇円+税。

本文一八四頁・図版十八頁、頒布予価

印 刷 発行日

604-8131 菅屋町四八
電話〇七五-二五二一三〇〇〇
令和二年六月二十日
創栄図書出版社株式会社

研究の普及を願い、同内容のものを研究報告として刊行した。刊行にあたつて推進役を担つていただいた石井清司・市川創の両客員研究員およ

び研究分担者、研究協力者諸氏のご尽力に謝意を表する次第である。

二〇二〇年六月二十日刊、A4判、二二〇〇円+税。

本文一八四頁・図版十八頁、頒布予価

印 刷 発行日

604-8131 菅屋町四八
電話〇七五-二五二一三〇〇〇
令和二年六月二十日
創栄図書出版社株式会社

研究の普及を願い、同内容のものを研究報告として刊行した。刊行にあたつて推進役を担つていただいた石井清司・市川創の両客員研究員およ

び研究分担者、研究協力者諸氏のご尽力に謝意を表する次第である。

二〇二〇年六月二十日刊、A4判、二二〇〇円+税。

本文一八四頁・図版十八頁、頒布予価

印 刷 発行日

604-8131 菅屋町四八
電話〇七五-二五二一三〇〇〇
令和二年六月二十日
創栄図書出版社株式会社

研究の普及を願い、同内容のものを研究報告として刊行した。刊行にあたつて推進役を担つていただいた石井清司・市川創の両客員研究員およ

び研究分担者、研究協力者諸氏のご尽力に謝意を表する次第である。

二〇二〇年六月二十日刊、A4判、二二〇〇円+税。

本文一八四頁・図版十八頁、頒布予価

印 刷 發行日

604-8131 菅屋町四八
電話〇七五-二五二一三〇〇〇
令和二年六月二十日
創栄図書出版社株式会社

研究の普及を願い、同内容のものを研究報告として刊行した。刊行にあたつて推進役を担つていただいた石井清司・市川創の両客員研究員およ

び研究分担者、研究協力者諸氏のご尽力に謝意を表する次第である。

二〇二〇年六月二十日刊、A4判、二二〇〇円+税。

本文一八四頁・図版十八頁、頒布予価

印 刷 發行日

604-8131 菅屋町四八
電話〇七五-二五二一三〇〇〇
令和二年六月二十日
創栄図書出版社株式会社

研究の普及を願い、同内容のものを研究報告として刊行した。刊行にあたつて推進役を担つていただいた石井清司・市川創の両客員研究員およ

び研究分担者、研究協力者諸氏のご尽力に謝意を表する次第である。

二〇二〇年六月二十日刊、A4判、二二〇〇円+税。

本文一八四頁・図版十八頁、頒布予価

印 刷 發行日

604-8131 菅屋町四八
電話〇七五-二五二一三〇〇〇
令和二年六月二十日
創栄図書出版社株式会社

研究の普及を願い、同内容のものを研究報告として刊行した。刊行にあたつて推進役を担つていただいた石井清司・市川創の両客員研究員およ

び研究分担者、研究協力者諸氏のご尽力に謝意を表する次第である。

二〇二〇年六月二十日刊、A4判、二二〇〇円+税。

本文一八四頁・図版十八頁、頒布予価

印 刷 發行日

604-8131 菅屋町四八
電話〇七五-二五二一三〇〇〇
令和二年六月二十日
創栄図書出版社株式会社

研究の普及を願い、同内容のものを研究報告として刊行した。刊行にあたつて推進役を担つていただいた石井清司・市川創の両客員研究員およ

び研究分担者、研究協力者諸氏のご尽力に謝意を表する次第である。

二〇二〇年六月二十日刊、A4判、二二〇〇円+税。

本文一八四頁・図版十八頁、頒布予価

印 刷 發行日

604-8131 菅屋町四八
電話〇七五-二五二一三〇〇〇
令和二年六月二十日
創栄図書出版社株式会社

研究の普及を願い、同内容のものを研究報告として刊行した。刊行にあたつて推進役を担つていただいた石井清司・市川創の両客員研究員およ

び研究分担者、研究協力者諸氏のご尽力に謝意を表する次第である。

二〇二〇年六月二十日刊、A4判、二二〇〇円+税。

本文一八四頁・図版十八頁、頒布予価

印 刷 發行日

604-8131 菅屋町四八
電話〇七五-二五二一三〇〇〇
令和二年六月二十日
創栄図書出版社株式会社

研究の普及を願い、同内容のものを研究報告として刊行した。刊行にあたつて推進役を担つていただいた石井清司・市川創の両客員研究員およ

び研究分担者、研究協力者諸氏のご尽力に謝意を表する次第である。

二〇二〇年六月二十日刊、A4判、二二〇〇円+税。

本文一八四頁・図版十八頁、頒布予価

印 刷 發行日

604-8131 菅屋町四八
電話〇七五-二五二一三〇〇〇
令和二年六月二十日
創栄図書出版社株式会社

研究の普及を願い、同内容のものを研究報告として刊行した。刊行にあたつて推進役を担つていただいた石井清司・市川創の両客員研究員およ

び研究分担者、研究協力者諸氏のご尽力に謝意を表する次第である。

二〇二〇年六月二十日刊、A4判、二二〇〇円+税。

本文一八四頁・図版十八頁、頒布予価

印 刷 發行日

604-8131 菅屋町四八
電話〇七五-二五二一三〇〇〇
令和二年六月二十日
創栄図書出版社株式会社

研究の普及を願い、同内容のものを研究報告として刊行した。刊行にあたつて推進役を担つていただいた石井清司・市川創の両客員研究員およ

び研究分担者、研究協力者諸氏のご尽力に謝意を表する次第である。

二〇二〇年六月二十日刊、A4判、二二〇〇円+税。

本文一八四頁・図版十八頁、頒布予価

印 刷 發行日

604-8131 菅屋町四八
電話〇七五-二五二一三〇〇〇
令和二年六月二十日
創栄図書出版社株式会社

研究の普及を願い、同内容のものを研究報告として刊行した。刊行にあたつて推進役を担つていただいた石井清司・市川創の両客員研究員およ

び研究分担者、研究協力者諸氏のご尽力に謝意を表する次第である。

二〇二〇年六月二十日刊、A4判、二二〇〇円+税。

本文一八四頁・図版十八頁、頒布予価

印 刷 發行日

604-8131 菅屋町四八
電話〇七五-二五二一三〇〇〇
令和二年六月二十日
創栄図書出版社株式会社

研究の普及を願い、同内容のものを研究報告として刊行した。刊行にあたつて推進役を担つていただいた石井清司・市川創の両客員研究員およ

び研究分担者、研究協力者諸氏のご尽力に謝意を表する次第である。

二〇二〇年六月二十日刊、A4判、二二〇〇円+税。

本文一八四頁・図版十八頁、頒布予価

印 刷 發行日

604-8131 菅屋町四八
電話〇七五-二五二一三〇〇〇
令和二年六月二十日
創栄図書出版社株式会社

研究の普及を願い、同内容のものを研究報告として刊行した。刊行にあたつて推進役を担つていただいた石井清司・市川創の両客員研究員およ

び研究分担者、研究協力者諸氏のご尽力に謝意を表する次第である。

二〇二〇年六月二十日刊、A4判、二二〇〇円+税。

本文一八四頁・図版十八頁、頒布予価

印 刷 發行日

604-8131 菅屋町四八
電話〇七五-二五二一三〇〇〇
令和二年六月二十日
創栄図書出版社株式会社

研究の普及を願い、同内容のものを研究報告として刊行した。刊行にあたつて推進役を担つていただいた石井清司・市川創の両客員研究員およ

び研究分担者、研究協力者諸氏のご尽力に謝意を表する次第である。

二〇二〇年六月二十日刊、A4判、二二〇〇円+税。

本文一八四頁・図版十八頁、頒布予価

印 刷 發行日

604-8131 菅屋町四八
電話〇七五-二五二一三〇〇〇
令和二年六月二十日
創栄図書出版社株式会社

研究の普及を願い、同内容のものを研究報告として刊行した。刊行にあたつて推進役を担つていただいた石井清司・市川創の両客員研究員およ

び研究分担者、研究協力者諸氏のご尽力に謝意を表する次第である。

二〇二〇年六月二十日刊、A4判、二二〇〇円+税。

本文一八四頁・図版十八頁、頒布予価

印 刷 發行日

604-8131 菅屋町四八
電話〇七五-二五二一三〇〇〇
令和二年六月二十日
創栄図書出版社株式会社

研究の普及を願い、同内容のものを研究報告として刊行した。刊行にあたつて推進役を担つていただいた石井清司・市川創の両客員研究員およ